勝平神社の石造狛犬

調査報告書

令和４年３月
秋　　田　　市

目　次

1　調査の趣旨　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2　勝平神社について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

3　勝平神社狛犬の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

4　佐藤與（与）吉郎について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

5　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

図版　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　15

勝平神社の石造狛犬
調査報告書

１　調査の趣旨

調査を実施した狛犬は、秋田市保戸野鉄砲町４番28号の勝平神社に所在する（図１）。勝平神社は、世相を反映した風刺・ユーモアの効いた地口絵を制作・奉納する地口絵灯籠祭（ぢぐちえどうろうまつり）で知られるが、日本遺産となった北前船の交易に関係する資料が同神社にあるとの情報提供を受け、関連資料の収集等の調査を実施した。

２　勝平神社について

(1) 保戸野

勝平神社が所在する保戸野は久保田城の西に位置する。

保戸野は、地形的には久保田城が築かれた神明山（現在の千秋公園）と高清水丘陵の間にある低地である。

江戸時代、城の西側を南北に直線的に流れるよう掘り替えた旭川を、武士町（旭川の東側・内町）と町人町（同西側・外町）の境界として位置づけ久保田城下町は町割りされたが、その中で保戸野は外町の北側に位置する。城下町を侍屋敷（緑色）、足軽屋敷（茶色）、町屋敷百姓屋敷（桃色）のように色別に図化した「御城下絵図」（図２）では、緑・茶色に色塗りされた「旭川の西側にある武士町」にあたる。

(2) 保戸野鉄砲町

保戸野鉄砲町は、保戸野の南西端、外町を南北に走り通町で西に直角にまがる羽州街道（図４）の沿線に位置し、羽州街道上の防御として土塁と堀を組み合わせた六道の辻の西側にある足軽町であった。

羽州街道の北側の通りには、東から聲体寺、来迎寺、蓮住寺の３寺院が並び、現在の勝平神社はその西側に位置する。

(3) 勝平神社の祭神

勝平神社は、武甕槌神（たけみかつちのかみ）と火産霊神（ほむすびのかみ）の２柱を祭神とする。

武甕槌神は、茨城県鹿島市の鹿島神宮の主神として祀られていることから、鹿島の神とも呼ばれる。雷神・剣の神といわれ、鯰絵では日本に地震を引き起こす大鯰を押さえる神として描かれている。また、大国主命（おおくにぬしのみこと）の国譲りの談判において大国主命の子、建御名方神（たけみなかたのかみ）を力比べで屈服させるなど、武の神の性格を有している。

火産霊神は、伊弉諾（いざなぎ）・伊弉冉（いざなみ）両神から生まれ伊弉冉神の死の原因となったことから伊弉諾神に命を奪われる神話を持つ火の神である。

『秋田県神社名鑑』には、旧河辺・雄和町を含めた市町合併後の秋田市内で

135の神社が掲載されているが、武甕槌神を祭神とする神社は、古四王神社（寺内)、磯前神社（東通)、鹿島神社（雄和椿川）の３社、火産霊神を祭神とする神社は、愛宕神社（土崎・仁井田・下北手・楢山)、竈神社（土崎)、金山瀧神社（太平)、目長崎神社（太平)、火産霊神社（柳田)、神明社（雄和相川）の９社である。

そして、勝平神社と同様に武甕槌神と火産霊神をともに祭神とする神社は新城神社（下新城）１社であるが、２柱の祭神の勝平神社に対し、新城神社は20柱の神を祭神としている。このように、秋田市内においては武甕槌神および火産霊神を祭神とする神社は多くない。

(4) 勝平神社の沿革①　－創建－

創建は、大同２年（807）に坂上田村麻呂の遠征の際、陣中守護のため勝平山に勧請されたと伝えられている。桓武天皇の時代、東北に遠征し蝦夷（えみし）と戦った坂上田村麻呂の伝説は東北一円に見られるが、田村麻呂伝説において、「田村麻呂が大同年間に創建した」という伝承を持つ神社仏閣は数多く認められる。

その状況を柳田国男は、『山島民譚集』で「大同二年は何故かは知らぬが我邦の伝説の上で極めて多事なる年である。殊に東北地方では弘法大師も田村将軍も共に此年を期して大いに活動している」と指摘している。

このことは、東北一円に田村麻呂の創建と伝えられる神社仏閣が数多くあるということに加え、なぜその年代が大同年間なのかという研究課題になっている。試みに『秋田県神社名鑑』から、「田村麻呂の伝承がある神社」「田村麻呂が陸奥に遠征していた延暦年間に創建（再建）された神社」「大同年間に創建（再建）された神社」を抽出すると82社であり、田村麻呂が来たという明確な資料のない出羽・秋田県としては非常に多い数といえる。

その中で、延暦年間（782～806）が33社、大同年間（806～810）が42社となっており、年数が長く、陸奥に長期間派遣されていた延暦年間よりも大同年間が多いことには何らかの意味があると考えられる。

柳田国男に師事した宗教学者の堀一郎は、京都の清水寺が大同２年（807）に田村麻呂により創建されたとの伝承から、田村麻呂と関係づけられる東北の社寺の創建伝承が大同年間とされた可能性を指摘している。

東北地方で「大同年間」「坂上田村麻呂」創建の伝承を持つ社寺は、100を越えると推定される。当時、中納言の要職にあった田村麻呂がそれだけの社寺の創建に現地で関わることは現実的ではないが、延暦年間の陸奥での長年にわたった戦の後の陸奥・出羽の社会の変容を反映したものである可能性があり、勝平神社の創建伝承もその意味で興味深いものである。

(5) 勝平神社の沿革②　－勝平西砂山での再建－

大同年間の創建の後、康平年間（1058～1065）の頃、源頼義が鞍馬寺毘沙門

として仰ぎ、勝平明神の名で勝平山西砂山に再建したとされる。

康平年間（1058～1065）は、大同年間（806～810）より約250年後である。源頼義が安倍氏・清原氏と戦った現在の岩手県を主戦場とする前九年合戦は頼義の下向から数えると永承６年（1051）から康平５年（1062）まで、現在の秋田県を主戦場とする後三年合戦は永保３年（1083）から寛治元年（1087）までであり、康平年間は前九年合戦の後半・終戦後、後三年合戦の開戦前にあたる。

鞍馬寺は、鑑真の高弟が毘沙門天を安置したことを起源とし、康平年間を含む11世紀には、「枕草子」で「鞍馬寺の参道」が「近うて遠きもの」として紹介され、11世紀後半には白河上皇が参拝されるなど信仰が高まっていた時期であると考えられる。

勝平は、『秋田沿革史大成』で「勝平ト云フモノノ館アリトス、又新屋村大門助右衛門ノ家ハ勝平山ヨリ移ルト云フル由、川尻村岡田五郎兵衛祖先延暦ノ頃、勝平山ニ住スルト云フ」とあり、古くから開かれた場所であることが窺える。

(6) 勝平神社の沿革③　－川尻毘沙門町・八橋への遷座－

江戸時代に入り、寛文２年(1662)に川尻毘沙門町、延宝６年（1678）に現在の八橋運動広場内へ２度遷座している。

川尻は、雄物川・旭川・太平川の合流点に囲まれた微高地である。下タ野遺跡から中世の集落跡が発掘されるなど早くから河川舟運の要衝であったと考えられる。文禄元年（1592）の「秋田実季分限帳」には1,732石余とあり、石高の高い大村であったことがわかる。江戸時代においては、城下町の西に隣接していたことから、鋳銭座など城下町・藩機能の一役を担っていた。また、享保15年(1730)の「六郡郡邑記」には、川尻の支郷として毘沙門田村の名前が見える。

川尻から延宝６年（1678）に遷座した八橋は、現在の八橋運動公園球技場（あきぎんスタジアム）の南西側にあたる。この場所は、八橋から寺内に東西に走る羽州街道から南側に曲がり川尻方面に向かう道沿いであり、かつては日吉八幡神社から御堂が並んでいた場所である。

寛政11年（1799)の「久保田城下絵図」（秋田県立図書館所蔵）では、日吉八幡神社から南に「ホサツ堂・天神・大子・ヱヒス・伊勢・松尾・毘沙門」が並んでいる。また、文政11年（1828）頃の「羽州久保田大絵図」（秋田県立図書館所蔵）では、日吉八幡神社から南に「寿量院・太子・天神・イビス・伊勢神明・毘沙門天」が並んでいる。さらに、江戸時代後期（1800年前後か）に描かれたとされる「秋田街道絵巻」（図３）では、日吉八幡神社から南に「寿量院・神明堂・御内宮・松寿院・毘沙門堂」が小高い丘の上に並んでいる。

これらの絵図・絵巻に描かれている神社や寺院は、名称や配置がそれぞれ若干異なっているものの、毘沙門（堂・天）だけは、一連の御堂の並びの南端に位置しており、これが現在の勝平神社の前身だと考えられる。

また、「秋田名蹟考」では、「寛文二年、社僧南照院を附して、堂宇を鐘田に

移し、毘沙門の像を納む。延宝六年、再び伊勢山に移し（略）川尻村毘沙門町ハ鐘田と昔ハ名つけたるよし」とあり、延宝６年（1678）の遷座時、当該地は「伊勢山」と呼ばれていたことが窺える。

建物については、「羽陰温故誌」によれば、「毘沙門堂　社北東西三十三間南北十八間、除地前ノ堂ハ三間四面ナリ。奥ノ堂ハ享保七寅年建」とある。前ノ堂、奥ノ堂の２棟あることが記されており、「秋田街道絵巻」でも前後に堂が並んで描かれている。

(7) 勝平神社の沿革④　－現在地への遷座－

明治19年（1886）４月30日、午後11時10分頃、秋田町川反四丁目から出火した火災は、激しい東南風により延焼し、外町・寺町、さらに北は保戸野愛宕町、西は八橋村・寺内村にも広がった。この大火は俵屋火事と呼ばれ、「秋田名蹟考」には、「明治十九年、火災にかかり烏有となれり」とある。俵屋火事の焼失区域図である「市街焼亡略図」に示される類焼範囲に、日吉八幡神社の南側にある２社が含まれており、これが江戸時代の絵図・絵巻における毘沙門堂にあたると考えられる。

勝平神社の社伝では、俵屋火事の際、保戸野北鉄砲町の秋葉神社を合祀し珍宝神社と改めるとある。俵屋火事の後、毘沙門堂が秋葉神社を合祀し珍宝神社と改称されたのである。その後、同20年（1887）には現在地に遷座、同25年（1892）には勝平神社と改称されている。

なお、秋葉神社は、静岡県浜松市と新潟県長岡市に総本社があり、秋葉大権現を祭神とし、火防・火伏の神として広く信仰されている。大火の後の神社の再建・再編にあたり合祀されたことは興味深い。

また、現在の勝平神社の位置を古地図で見ると、明治34年（1901）の「秋田市詳密地図」では名称はないものの神社の地図記号が記載されており、明治45年(1912）の「新撰秋田市全図」では「勝平神社」の記載がある。

以上のように、勝平神社は、東北地方に広く見られる「大同年間」「坂上田村麻呂」の創建伝承を持ち、数度の変遷を経た後に、創建の地「勝平山」の地名を社名とし現在に至っている。

ともに武の神である毘沙門天と武甕槌神、火防・火伏の神である火産霊神と秋葉大権現という関係する神々からも、神社の歴史の奥深さを伝えている。

なお、境内社の稲荷神社は、銭を鋳造した頃、伏見稲荷大社の御分霊を勧請したもので古くから銭座稲荷と称され、商売繁盛の守護神として崇敬されている。また、境内には今回調査した狛犬の他にも、文化元年（1804）の甲子碑、寛政８年（1796）奉納の石灯籠、天明５年（1785）奉納の手水鉢などの貴重な石造物が残されている。

(8) 地域とのつながり

勝平神社の氏子範囲は、保戸野鉄砲町周辺である。この地域は、「旭川の西側にある武士町」であり、代々の氏子も多い。

勝平神社と地域とのつながりについて、広く知られている「地口絵灯籠祭」を通して考えてみたい。地口絵灯籠祭は、５月１２・１３日に行われる祭りである。その時代時代の様相・政治・経済・文化・教育などを庶民の心情で風刺した地口を絵灯籠に表現したもので、神社の境内はもとより各家々にも掲げられ、多くの人で賑わう。近年は、絵灯籠の講習会も開かれ、子どもの手によるものも多くなってきている。将来的には、地元の小学校などで地域学習の一環として取り上げてもらいたい、という考えもある。

この祭りに代表されるように、勝平神社は地域と密接なつながりを持っており、地域住民の厚い崇敬を集めている。

なお、勝平神社の年間行事は、以下のとおりである。

実施日	行事名
１月１３日	新年祭
５月１２日	宵宮祭
５月１３日	例祭
５月１２・１３日	地口絵灯籠祭
７月３０日	夏越大祓
１１月１３日	秋祭
１２月３１日	年越祭 師走大祓

３　勝平神社狛犬の概要

(1) 狛犬について

一般に狛犬と呼ばれる一対の動物の像は、当初は左右別々の霊獣で、角があり口を閉じている狛犬、角がなく口を開けている獅子の組み合わせだった。しかし、時代が下るに従い形態の区別がなくなり、呼び方も狛犬のみになったといわれている。寺社の入口の両脇、あるいは本殿・本堂の正面左右などに一対で向き合う形、または寺社に背を向けて、参拝者と正対する形で置かれていることが多い。

起源については諸説あるが、古代インドで仏像の両脇に獅子（ライオン）の像を置いたことがはじまりとされ、日本には仏教とともに伝わり神聖な場所を守るようになったと考えられる。

また、鎌倉時代頃までは木造で屋内に置かれていたものが、後に屋外に置かれるようになり、風雨にさらされてもよいよう、石造になったとされている。

(2) 位置・寸法

勝平神社の狛犬は、社殿の正面に向かい右側に口を開けた阿形（写真１～３）、左側に口を閉じた吽形（写真４～６）が位置し、吽形に角がある。

阿形・吽形ともに、台座は３段（以下、下から「１段台座」「２段台座」「３段台座」と表記する。）であり、上にいくに従い小さくなる。高さは２段台座→３段台座→１段台座の順に厚い。

各寸法は表１のとおりである。

		阿形	吽形	備考
１段台座		長辺98cm、短辺72cm、高さ12cm	長辺98cm、短辺76cm、高さ11cm	近年の台座か
２段台座		長辺84cm、短辺53cm、高さ40cm	長辺82cm、短辺51cm、高さ42cm	刻字がある
３段台座		長辺66cm、短辺36cm、高さ10cm	長辺66cm、短辺35cm、高さ11cm	狛犬と一体
狛犬	高さ	全高79cm,脚40cm	全高81cm,脚38cm	
	幅	頭(右耳端～左耳端)36cm	頭(右耳端～左耳端)36cm	

表１　狛犬寸法

(3) 形状

狛犬にはさまざまな姿形があり、いくつかの型に分類されるが、『狛犬かがみ』によると、江戸獅子（江戸風）と浪花狛犬（浪花風）のように、作風として大まかに分類することもできる。（表２）

勝平神社の狛犬は阿形・吽形とも、「前髪がほとんどなく太い眉がある」「目は大きなギョロ目」「大きな鼻」「顎髭なし」「人間歯（入れ歯、獅子頭の歯）」「二重の唇」「まっすぐな背中と蹲踞の姿勢」「団扇型で背中に密着した尾」「子獅子なし」といった浪花獅子の特徴を持っている（写真９・10）。

	江戸獅子	浪花狛犬
前髪・眉	カールしてほぼ中央分けのヘアスタイル	前髪はほとんどなく、代わりに太い眉がある
目	やや小さめで、楕円形。目玉の瞳は描かない場合が多い	大きなギョロ目。ほぼ正円形。目玉の瞳を描く場合が多い
耳	伏せ耳が基本	折れ耳、または横耳が基本
鼻	いわゆる獅子鼻だが、それほど大きさを強調しない	大きく胡座をかいた獅子鼻や団子鼻
髭	顎髭があり、前髪に合わせてカールしている	顎の真下にはなく、顎の両脇に瘤状に描かれる
唇	極端な二重にはならない	二重に縁取りする
歯	あまり彫り込まないが、ある場合は犬型（犬歯状）が多い。左右２本の犬歯のみ彫り込むこともある	特に阿形は多くが歯をむき出しにしており、形状は人間型（入れ歯型、獅子頭型）が多い
鬣	体毛とともに長毛で、流麗に流れる	螺髪のように瘤状に短く巻いているものが多い
尾	江戸後期からは下がって身体に巻くように密着。初期のものは尾が立っている	団扇型が基本で直立。背中側に密着している
背中	猫背で、丸みのラインの美しさを強調	ほぼ真っ直ぐ背筋を伸ばしている
子獅子	１～３頭付属しているものが少なくない	いても一頭どまりであることが多い
姿勢	前脚を上げていたり、立ち上がっていたりするものもある。構図的に自由度が大きい	お座り（蹲踞）が基本で、あまり自由度はない
全体	基本は「獅子」型。阿吽の形式は踏襲しているが、「獅子・狛犬」といった左右で形を変える様式は崩れ、吽像にも角のあるものはほとんどない	顔は縦長や丸顔で彫りが浅い。人面、鬼面に近い印象。また、本来の「獅子・狛犬」の形式を踏襲しているため、吽像の頭部には角があるものも多い

表２　江戸獅子と浪花狛犬（『狛犬かがみ』より引用）

(3) 石材

狛犬本体は和泉石、台座は白御影石と考えられる。

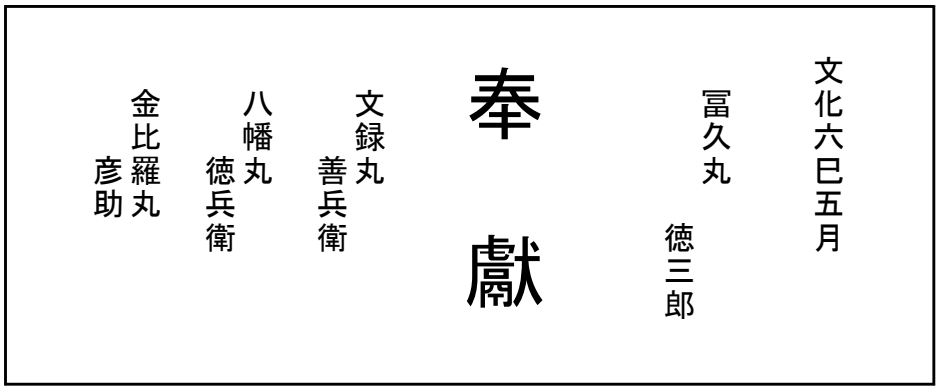
和泉石は、主に大阪府泉南地方・阪南市で産出される、緑灰色を呈する砂岩

の一種で、緻密で加工しやすいことから岸和田城をはじめとした城の石垣や石碑、墓石などに幅広く活用されてきた。

白御影石は、花こう岩の一種である。大量に採れる瀬戸内産のものが質がよいとされ、岡山・広島・香川で多く産出し、尾道や下関で加工されることが多かった。北前船に代表される日本海海運において笏谷石などと同様、船を安定させるためのバラストや商品として積み込まれ、日本海側を中心に各地に運ばれている。神社の鳥居・灯籠・手水鉢などに加工されることも多く、秋田市内でも休寶寺（土崎）や蒼龍寺（土崎）の大型の常夜灯、寶塔寺（八橋）の石造五重塔（市指定文化財・日本遺産構成文化財）などが御影石製であり、日本海海運によって運ばれてきたと考えられている。

(4) 刻字

２段台座の社殿に向かって正面側に、下の模式図のような刻字がある（写真３・６）。



阿形狛犬の台座

吽形狛犬の台座

右端の刻字から、文化６年（1809）５月に奉納されたことがわかる。勝平神社の沿革からすれば、八橋に所在した延宝６年（1678）から明治19年（1886）までの間に奉納されたことになり、俵屋火事での社殿焼失後、現在地への遷座の際に、狛犬も移設したと考えられる。なお、江戸時代後期（1800年前後か）に描かれたと考えられる「秋田街道絵巻」の八橋の毘沙門堂には、石段を登っ

た鳥居の両端に一対の石灯籠が描かれているが狛犬の姿は見えない。

刻字には人名と船名が認められる。人名は７名の名前が認められるが、「佐藤與吉郎」（写真８）のみ姓があり、他の６名は名前のみである。また、他の６名は船名とセットになっているが「佐藤與吉郎」には付随した船名はない。また、３段台座の参道側（狛犬の正面）には「ヨ」（以下、「〇ヨ」という。）の刻字があり（写真７）、奉納者の屋号と考えられる。

４　佐藤與（与）吉郎について

(1) 手前給人・佐藤与吉郎

狛犬を奉納したと考えられる佐藤與（与）吉郎の名前および「〇ヨ」の屋号を持つ久保田の商店は、「東講商人鑑」（安政２年(1855)）や「秋田市全図」（明治38年(1905)、市内の商店等の一覧を添付）には見られないことから、佐藤與（与）吉郎が、町の商人であった可能性は高くない。

一方、『渋江和光日記』（県指定文化財、秋田県公文書館所蔵）には、「佐藤与吉郎」の記述が頻繁に出てくる。そのほとんどが、「文政五年十二月廿八日　佐藤与吉郎歳暮ニ酒 三升 肴 あら壱本鮒五ツ 呉申候」のように渋江和光家への贈答品を伴う年末年始のあいさつに関する記述である。

また、佐藤与吉郎については、「文化十一年　十二月廿七日　佐藤与吉郎 上野町人此方之用達 より、歳末祝義として酒三升・肴 塩鮭二尺 呉申候」「文化十三年十二月廿六 佐藤与吉郎 用達町人也 方より、歳末祝義として、酒 三升 肴 さは 呉申候」とあり、上野に在住の渋江和光家用達の町人であることがわかる。

文政11年（1828）頃の「羽州久保田大絵図」（図５）では、川尻地区が詳細に記述されている。雄物川の川岸付近に御米蔵・御馬場などの藩の施設や、梅津・金・小貫・小田野家などの下屋敷が並んでいるが、米蔵と総社神社を結ぶ通り沿いに佐藤与吉郎の屋敷地が記述されている。

『秋田藩の用語解説』の「手前給人」の項目では、「有力家臣の家来の内、主人の居住地と離れた農村に常住しており元は農民であった者が、その村に知行地を持つ有力家臣の新田開発に多大な貢献をした功績により有力家臣の家来（家中）に取り立てられ主人から知行地を分与された在村の武士（藩主から見れば家臣の家来なので陪臣となる）」（一部省略）とし、手前給人の事例として渋江堅治（和光）家の12人の手前給人のなかに石高10石の川尻上野の佐藤与吉郎がいる。（表３）

No.	居住地	手前給人名	手前給人の禄高			召抱時期	召抱の理由
			元文4禄高	和光日記中	明治3年		
1	馬場目村	石井早太	50石		27.506石	正徳年中	
2	神宮寺村	仙波三郎左ヱ門	30石		13.3石	天和年中	
3	神宮寺村	高橋六郎兵衛	180石				
4	神宮寺村	十右衛門				文化年中	
5	神宮寺村	高橋十右ヱ門	100石				
6	飯詰村	久米又左ヱ門	100石		64.754石	元禄年中	
7	飯詰村	久米長左ヱ門	20石	15石(天保4年)			
8	小貫高畠村	冨樫刑部左ヱ門		7石(天保3年)		天保3年	神宮寺村ニ而7石
9	川尻上野	佐藤与吉郎		10石(文政6年)		文政6年	20年来財用方用事承ニ付
10	小貫高畠村	吉兵衛		22石(文政7年)		文政7年	開発忠進願い出ニ付
11	川ノ目村	八右ヱ門		7石(天保3年)		天保3年	借方ニ付て
12	飯田村	喜之助		7石(天保3年)		天保3年	借方ニ付て

表３　渋江家の手前給人（『秋田藩の用語解説』より引用）

また、手前給人の実態として、「渋江家の場合、手前給人６人を除く77人の家中は、渋江屋敷にある517坪の長屋に居住していたが、手前給人の６人はそれぞれの村に居住し、季節の節目ごと渋江屋敷を訪れ和光に年賀のあいさつを尽して主従関係を確認しあい、事あるごとに村の特産品を持参している」ことが紹介されている。

『川尻乃史跡』では、珍宝神社（川尻上野町４）について、「以前八橋の神明山の南隣の毘沙門山（現八橋運動公園スポーツ会館の南付近）に毘沙門天を祭った

堂があって近隣からの多くの参拝者で賑わっていたが明治19年俵屋火事で焼失してしまった。そのため氏子達は北鉄砲町の秋葉神社に合祀し、勝平神社とした。再興を願った川尻毘沙門町の氏子達は鰐口とむかでの吹流しを持ってきて町の中心部に珍宝神社として祀ったものである。ところが昭和６年５月、川口、川尻一帯の大火災で類焼、翌年再建されたのが現在の社である。御神体の毘沙門天像は豪族佐藤与吉郎が明和、安永の頃、大阪まで米を輸送した毘沙門丸の守りとしていたものを神社に納めたものである」とあり、俵屋火事で焼失した毘沙門堂の再興において保戸野の勝平神社とともに川尻に珍宝神社を祀ったこと、そのご神体が、船主であった佐藤与吉郎が奉納したものであると伝えられている。

保戸野の勝平神社とともに八橋の毘沙門堂との系譜がたどれる川尻の珍宝神社のご神体を、大阪への海運に関わっていた佐藤与吉郎が奉納したということは、文化６年（1809）に八橋毘沙門堂時代に奉納されたと考えられる船名が記された狛犬の奉納者「佐藤與吉郎」は、川尻と密接な関係を持つ人物であり、渋江和光の手前給人であった川尻上野在住の「佐藤与吉郎」と同一人物であると考えられる。

(2) 新家・佐藤與吉郎

秋田藩主佐竹家の一門や重臣などの氏名や家系等を記した『秋田武鑑』にも佐藤與吉郎の名前がある。「安永巳来被召出候新家之面々」の項に、「文政八酉年二月二十二日　御旗本永近進並　同十亥年十二月二十六日　一代近進　秋田郡川尻高二百二十六石余　佐藤與吉郎」と記されていることから、佐藤與吉郎は、文政８年（1825）に新家に召し出された人物であることがわかる。

新家とは、「地主や商人が藩に金銭や米を献上したり、又は開発、植林、産物の取り立てなどで功績があったとの理由で新しく武士身分になった人のこと」（半田2016）である。文政６年(1823)に渋江家の手前給人になった佐藤與（与）吉郎は、２年後の文政８年(1825)には、藩に対し何らかの貢献をした功績で新家に召し出されたのである。

(3) 北前船の船主・佐藤与吉郎

北前船の寄港地であった外ノ浦（現在の島根県浜田市）には、廻船問屋であった清水家に「諸国御客船帳」（浜田市指定文化財）が残されている。

外ノ浦港に入港した延享元年(1744)から明治34年(1901)までの間の廻船8,906艘が国別・地域別に丁寧に整理され、船印・帆印・船名・船籍・船主・船頭名・入津日・出帆日・積荷・揚荷などが記載されている。

この中に、「秋田　久保田」の八幡丸と金比羅丸を確認でき、それぞれに「〇ヨ」および「佐藤与吉郎」の記載がある。客船帳の記載様式から、佐藤与吉郎が船主、文八・彦助が船頭と考えられる。また、「米御売、平子干鰯御買」との記載があることから、佐藤与吉郎は西廻り航路を利用した買い積み商船である北前船の船主

秋田　久保田			
			佐藤与吉郎様
㋭	（帆印）	八幡丸	文八様
		文化九申五月廿日登入津、米御売、平子干鰯御買、	
		廿八日登出船被成候、	
			同
㋭	（帆印）	金比羅丸	彦助様
		文化九年申八月十二日秋田登入津、十五日出船、	

「諸国御客船帳」の記載内容

として商船活動を行っていたことを窺い知ることができる。これらの船が外ノ浦港に入港したのは、狛犬が奉納された文化６年（1809）の３年後のことである。

先述したように、勝平神社の狛犬の３段台座には「〇ヨ」、２段台座には「金比羅丸」「八幡丸」「佐藤與吉郎」が刻まれている。したがって、勝平神社の狛犬を奉納したのは、外ノ浦に文化９年（1812）に入港した２艘の北前船の所有者であった久保田の北前船船主・佐藤与吉郎である可能性が高い。

５　まとめ

勝平神社の石造狛犬の奉納者である佐藤與（与）吉郎の動静が、秋田市の『渋江和光日記』および『秋田武鑑』、島根県浜田市の「諸国御客船帳」に認められ、渋江和光の手前給人がいわゆる北前船の船主として商船活動を行っていたことが明らかになった。また、「諸国御客船帳」において佐藤与吉郎の在所が「久保田」となっていることは、米蔵・鋳銭座など城下町や藩機能の一役を担い、また、「御城下絵図」の色分けで侍屋敷・足軽屋敷が混在する藩政期の川尻の、城下町における位置づけなどを考えるうえでも貴重な資料といえる。

現在、秋田県内で文化財に指定されている狛犬（県指定）は、赤神神社石製狛犬（男鹿市、室町～安土桃山時代）、金峰神社木造狛犬（にかほ市、室町時代）、藤倉神社石製狛犬（秋田市山内、16世紀後半）、八幡神社石製狛犬（由利本荘市松ケ崎、阿形17世紀前半、吽形16世紀末～17世紀初頭）、金刀比羅神社石製狛犬（秋田市土崎、17世紀前半）の５件である。

勝平神社の石造狛犬は文化６年（1809）の奉納であり、県内で文化財指定されている狛犬に比べ年代は新しいが、刻字からは、いわゆる北前船による交易、石材・狛犬の伝播、そして久保田城下町における信仰、社会・産業構造などを複合的に示す貴重な資料であると考えられる（図６）。

【引用・参考文献】

新秋田叢書編集委員会編 1977「羽陰温故誌」『第３期新秋田叢書（３）』
柚木学編 1977『諸国御客船帳 上巻 清文堂史料叢書第12刊』
柚木学編 1977『諸国御客船帳 下巻 清文堂史料叢書第13刊』
新秋田叢書編集委員会編 1978「秋田名蹟考」『第３期新秋田叢書（13)』
株式会社平凡社 1980『日本歴史地名大系第五巻 秋田県の地名』
三浦賢童編 1983『秋田武鑑』
川尻史談会1989『川尻乃史跡』
秋田県神社庁編 1991『秋田県神社名鑑』
秋田県公文書館編 1996『渋江和光日記 第１巻』
秋田県公文書館編 1997『渋江和光日記 第２巻』
秋田県公文書館編 1998『渋江和光日記 第３巻』
秋田県公文書館編 1998『渋江和光日記 第４巻』
秋田県公文書館編 1999『渋江和光日記 第５巻』
秋田県公文書館編 1999『渋江和光日記 第６巻』
秋田県公文書館編 2000『渋江和光日記 第７巻』
秋田県公文書館編 2001『渋江和光日記 第８巻』
上杉千郷 2001『狛犬事典』
秋田県公文書館編 2002『渋江和光日記 第９巻』
秋田市 2003『秋田市史 第16巻民俗編』
大城屋良助編 2006「東講商人鑑」『復刻　東講商人鑑』
たくきよしみつ 2006『狛犬かがみ』
半田和彦 2016『秋田藩の用語解説』

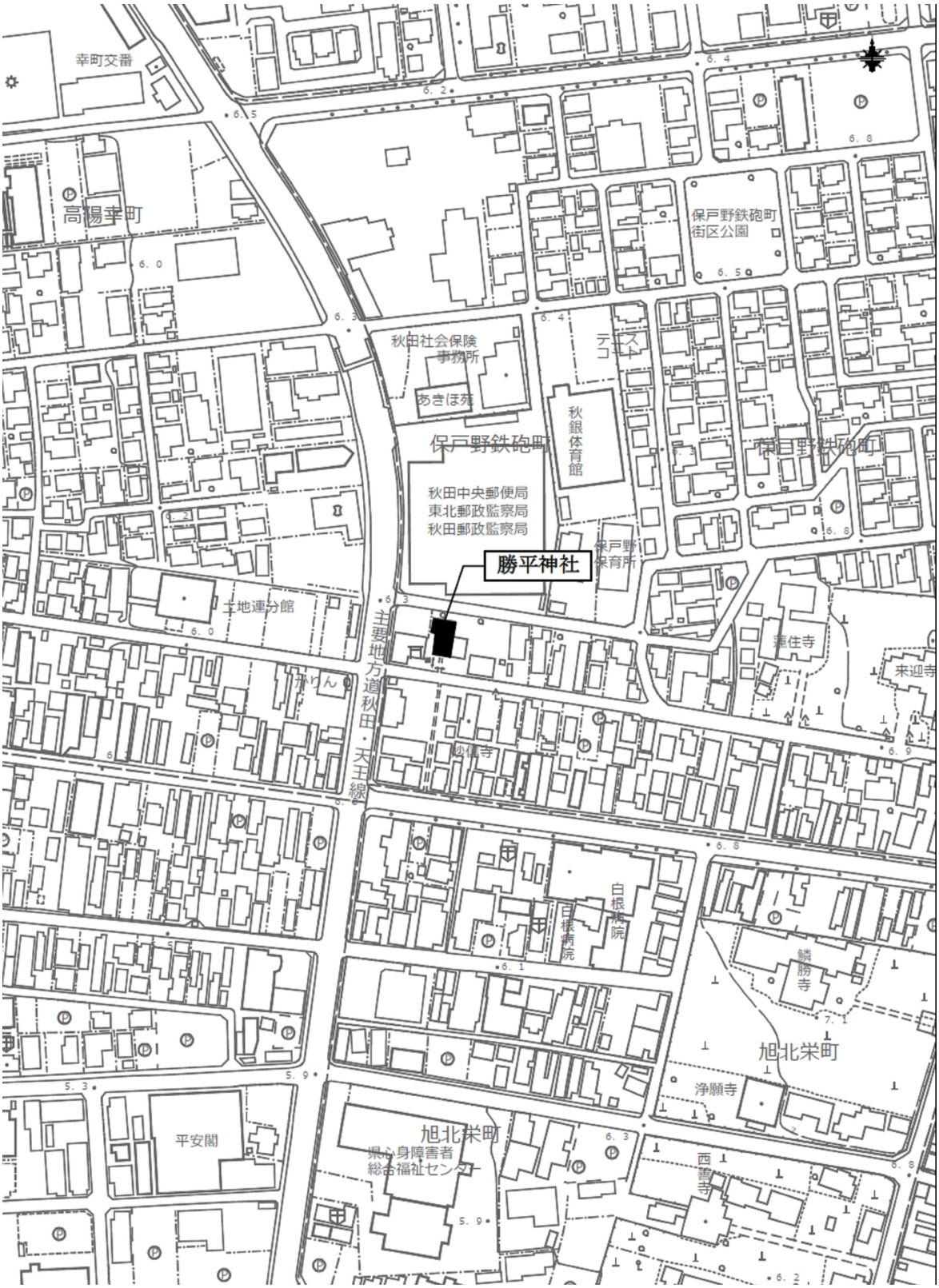

幸町交番
高陽幸町
保戸野鉄砲町
街区公園
秋田社会保険
事務所
テニス
コート
あきほ苑
秋銀体育館
保戸野鉄砲町
保戸野鉄砲町
秋田中央郵便局
東北郵政監察局
秋田郵政監察局
保戸野
保育所
勝平神社
土地連分館
主要地方道秋田・天王線
蓮住寺
来迎寺
必信寺
白根病院
白根病院
鱗勝寺
旭北栄町
浄願寺
平安閣
旭北栄町
県心身障害者
総合福祉センター
西蓮寺

図１　勝平神社位置図

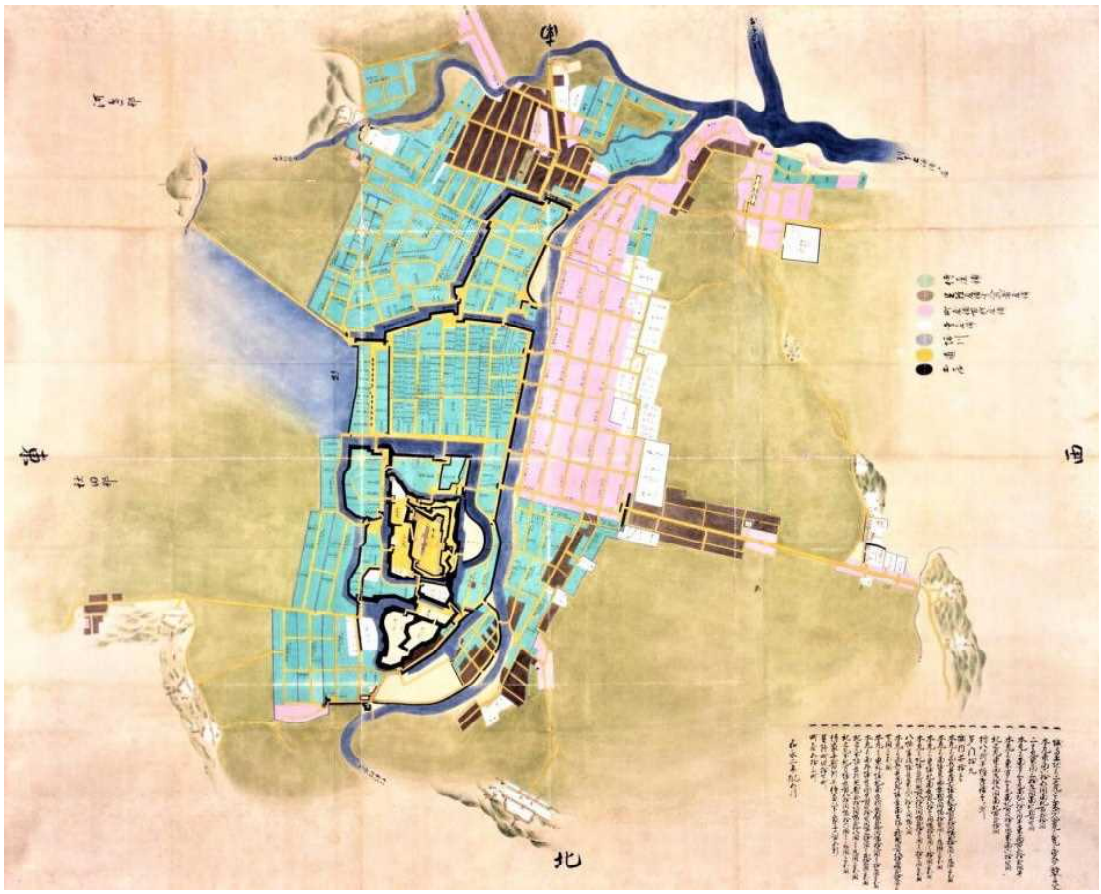


図２　御城下絵図　［秋田市立佐竹史料館所蔵］

図３　秋田街道絵巻（上巻・八橋部分）［秋田市立千秋美術館所蔵］
※中央右側：赤い鳥居が日吉八幡神社、左端：毘沙門堂

図４　羽州街道ルート

（『あきた羽州街道（羽州街道ウォーキングガイド）』［秋田市作成］より）

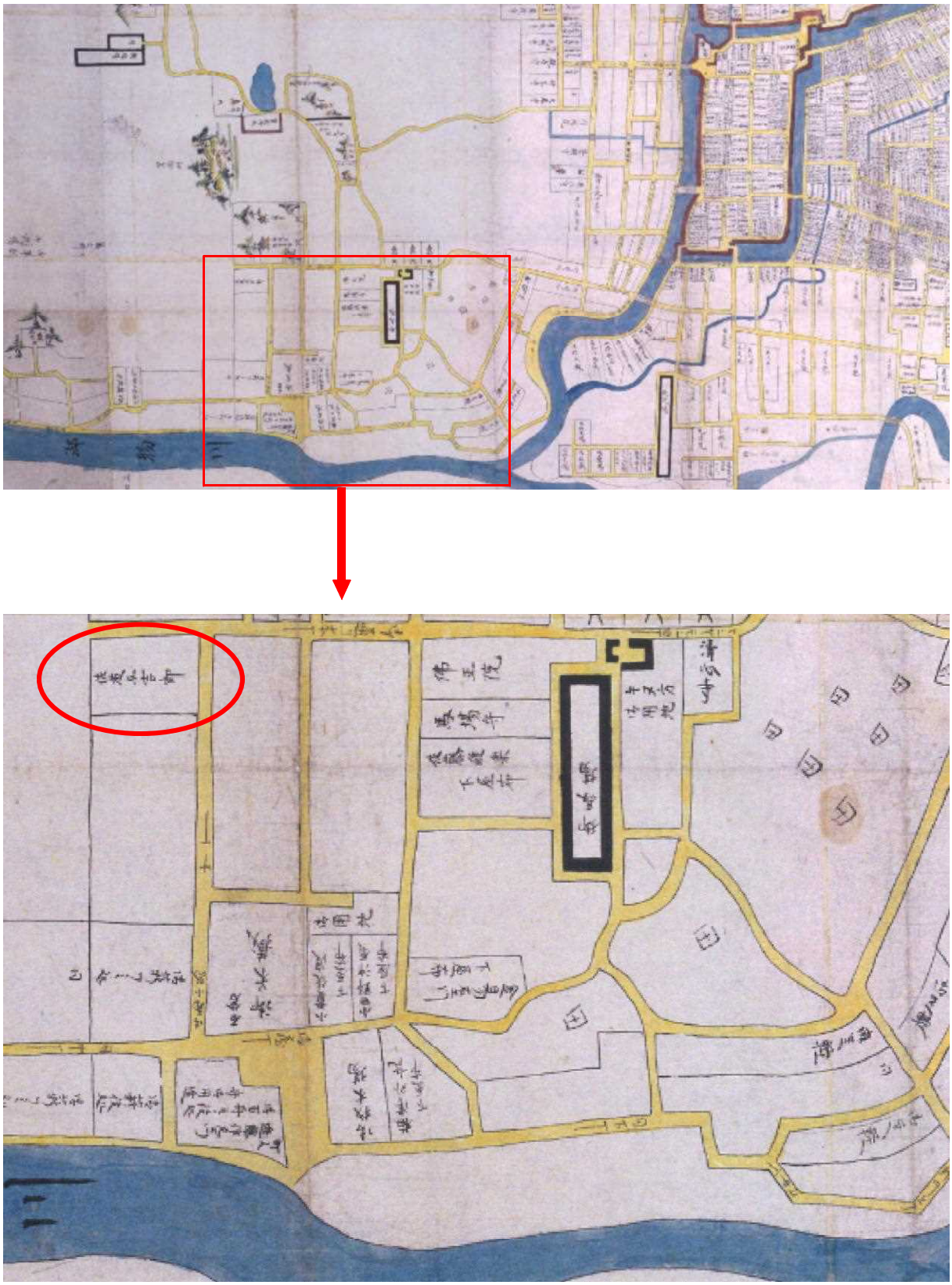


図５　羽州久保田大絵図（部分）［秋田県立図書館所蔵］
※赤丸部分が「佐藤与吉郎」

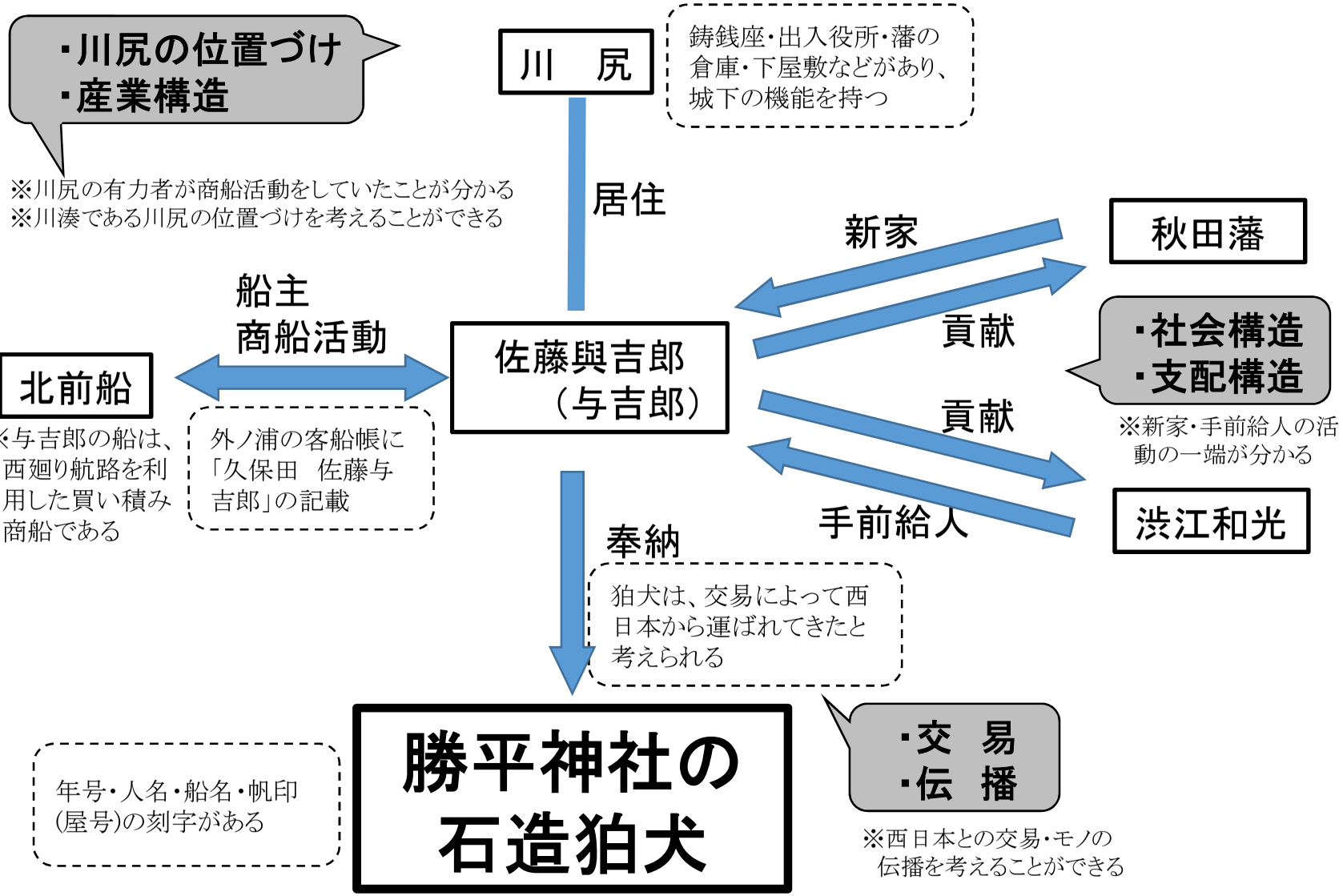


図６　狛犬から分かること　勝平神社の石造狛犬は、　で記した複合的な要素を示す資料である。

写真１　阿形狛犬　側面

写真２　阿形狛犬　正面

写真３　阿形狛犬　台座

写真４　吽形狛犬　側面

写真５　吽形狛犬　正面

写真６　吽形狛犬　台座

写真７
吽形狛犬　台座の「〇ヨ」

写真８
吽形狛犬　台座の佐藤與吉郎

写真９
吽形の顔（ギョロ目、瞳を描く、団子鼻、二重唇、歯など浪花狛犬の特徴を持つ。）

写真10　阿形狛犬の尾
団扇型の浪花狛犬の特徴を持つ